

第64回愛知県総合教育センター研究発表会

テーマ「子供たちの可能性を引き出す『令和の日本型学校教育』の学びの在り方」（2年次）

令和6年11月29日（金） 愛知県総合教育センター

第64回愛知県総合教育センター研究発表会を、「子供たちの可能性を引き出す『令和の日本型学校教育』の学びの在り方（2年次）」というテーマの下開催した。当日はZoomを用いたオンライン開催、令和6年12月19日から令和7年1月31日までは、オンデマンドによる動画配信を行った。研究発表会当日のオンライン開催には約300名の参加者があり、オンデマンド動画の視聴回数は、延べ979回となった。

以下に研究発表会の概要を紹介する。

1 開会行事次第

- ・開会のことば
- ・所長挨拶
- ・基調提案
- ・閉会のことば

2 講演

◆演題 「納得感や充実感のある協働的な学びを求めて

～子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師集団の在り方～」

◆講師 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 教授

名古屋大学教育学部附属中・高等学校 校長

柴 田 好 章 氏

3 研究発表・研究協議

次の研究について発表と協議を行った。なお、各研究の詳しい内容については、当センターウェブページ「研究紀要第114集（令和7年4月1日掲載予定）」を参照。

◇第1部会（小中高特）

自ら学ぶ力の育成に関する研究

【発表の概要】

「自ら学ぶ力の育成に関する研究（中間報告）」では、これから時代を生き抜く子供たちが身に付けるべき「自ら学ぶ力」について解説するとともに、研究協力校が研究の進捗状況を含め、研究協力校で設定した「自ら学ぶ力」について、小学校・中学校・義務教育学校・高等学校・特別支援学校の先生方に参考となる実践報告を行った。また、「自ら学ぶ力」を育成するためには、「学びに向かう力、人間性等」

を養うための学びのサイクルが大切であると考え、本研究では、児童生徒が学習に見通しをもつこと（Anticipation）、学習方略を身に付けること（Action）、振り返りを行うこと（Reflection）、それをまた次の学習への見通しへつなげていく学習サイクルをAARサイクルとし、このAARサイクルを円滑に回すためのポイントについても解説した。

◇第2部会（小中特）

全国学力・学習状況調査に関する研究

【発表の概要】

文部科学省が実施している全国学力・学習状況調査の結果や本県の経年変化等を分析し、見えてきた本県の課題等を基に、児童生徒の学力・学習状況の向上・改善を図った。

授業改善の方向性として、「できるだけ楽しみながら基礎・基本の定着を図ろう」「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善に取り組もう」「1人1台端末を積極的かつ効果的に活用し、学習活動の充実を図ろう」の三つを示し、研究を進めた。

調査結果の分析から見えてきた各教科の課題を踏まえ、「児童生徒に、つけたい・のばしたい力と授業改善のポイント」という観点で授業のポイント等をまとめるとともに、「児童生徒が関心・意欲をもち、対話を通して学ぶ意味や価値を実感する場面」「各教科の特質に応じて見方・考え方を発揮する場面」「ICTを効果的に活用する場面」を授業アドバイスシートとして提案した。

◇第3部会（高特）

県立高等学校教育課程課題研究（理科）

【発表の概要】

学習指導要領の趣旨を踏まえ、高等学校理科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、「探究の過程」を通じた学習活動の在り方について、昨年度から取り組んだ実践例を中心に理科の科目ごとに研究発表を行った。

物理分野は、単振り子の生徒実験の中で、振り子の周期がどんな物理量と関係しているのか生徒が仮説を立てる段階を踏まえることで、より探究的な学習ができるよう工夫した。本年度は、当該単元以外でも効果的に実験の機会を設けることで、考察する力の育成が高まり、より効果的であった。化学分野は、幾つかの金属の単体を判別する方法を考案することを主軸とした活動を行った。既存の知識を活用し、生徒が主体的に実験計画を立案したり、他の生徒と考えを述べ合ったりして、対話的な活動が促進されるよう授業展開を工夫した。本年度は、金属イオンを含む数種類の溶液を用意して実験を行ったことで、単元のねらいをより達成する展開になった。生物分野は、学校の敷地内等でバッタを対象生物とした標識再捕法に取り組み、ICT機器の効果的な活用を意識して、探究的かつ経年的に学習できる授業モデルを考案した。本年度は、季節や周辺環境等で昨年度の課題に挙がっていたことについて改善を図った。

◇第4部会（高特）

県立高等学校教育課程課題研究（英語）

【発表の概要】

観点別評価の一つである「主体的に学習に取り組む態度」について、単元を通した指導に基づき、妥当性と信頼性を確保した評価の在り方についての研究を行った。指導と評価の一体化の観点より、中間評価を充実させることで、単元の終わりに行うパフォーマンステストを通して「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」を一体的に行う評価を行う実践を行った。また、振り返りシートの在り方についての研究を通して汎用的な振り返りシートを作成し、参加者に提供した。さらに、プロセスライティングにおいて、生徒間の相互評価や授業者からの助言を基にした推敲の過程を可視化することで「粘り強い取組を行おうとする側面」と「自らの学習を調整しようとする側面」を見取る工夫をした。そして、ジェスチャーやアイコンタクト、声の大きさや抑揚などのノンバーバルスキルの評価を「主体的に学習に取り組む態度」の観点で評価する可能性についての報告を行った。